

「一応大腸検査をしたほうがよいですね」と言われてから五日後、少し重い気分で健康センターの門をくぐった。看護師の優しい問診のあと検査スタート。

「十五分おきにコップ一杯(250ミリリットル)の腸洗浄液を一リッター飲んでください、一リッター飲んでら血圧を測り、問題なければ次の一リッター、合計三リッター飲んでら検査を始めます」

と、てきぱきと言ひ渡された。

麻酔剤を一塗りされた後カメラが進入、痛くも痒くもなく実にスムーズだ。カメラが大腸の一番奥まで到達する間、多少圧迫感を感じ焦ったが看護師の「大丈夫ですか、今一番奥まで行きましたから次は検査をしながら出てきますね」、耳元の優しい言葉に安堵感を覚えた。病気は風邪か二日酔いしか経験の無かった私は、この言葉は何と救われるのだろうかと思ったりした。

横になっている間恐る恐るカメラの画像を覗いたが不思議な感じである、いつも青い空や星空を見ているが自分の体の中がこんなに綺麗なものだとは知らなかった、神秘的である。

この繊細で神秘的な体がいとおしくなり、傷を付けたくないという強い気持ちに襲われた。

その後医師からの説明で「問題ありません、実に綺麗な腸です」と言われ胸を撫で下ろした。

検査後お茶をもらいながらふと壁を見ると「まごわやさしい」と書いた大きな張り紙が目についた。

ま・・・豆類

ご・・・ごま

わ・・・わかめ(海藻類)

や・・・野菜

さ・・・魚

し・・・しいたけ(きのこ類)

い・・・いも類

細かい説明を読むまでも無く、今後は食生活、飲酒生活に気を付けたいと心から思った。

17・頭から離れない一言(2005. 11)

この感動を書こう書こうと思いつつ、朝晩めっきり冷える季節になってしまった。

九月の末にベルリンマラソンがあったが、アテネオリンピックで女子マラソンの金メダリストになった野口みずきさんが、世界歴代三位の二時間十九分十二秒で優勝した。

最初からほぼ独走状態だったが、この記録はアジア新記録でもあるとのことだ。百五十センチ、四十一キロ、二十七歳、私は柔道やマラソンを観るのが好きだが、見るからに強そうな体格を持つ選手の中にあって快挙を成し遂げる選手を見ると、勇気をもらおうと同時に人間に対し何か不思議な思いになったりする。

三十五キロメートルあたりで「足が重く棒のようになった」らしいが、その時彼女は二年前にロンドンで世界記録を出した英国のラドクリフなら絶対諦めないで走るはずだ」と、独走状態であったが己を叱咤激励し、見えない記録保持者と戦ったそうである。

彼女は毎日四十キロメートルを走りこむ厳しい練習と言うのか、あるいは訓練か闘いというのか、来る日も来る日もひたすら走りこんで調整したらしいが、彼女が何気なくいう一言「走った距離は裏切らない」がいつまで経っても頭から離れない。

18・ご冥福を祈ります (2005.11)

八月に「ローザパークス物語」について書いたが、十月二十四日に九十二歳で逝ったことを今朝の新聞で知った。またテレビのワールドニュースでも放送していた。

連邦議会に安置された「公民権運動の母」に三万人余りが別れを惜しんだそうであるが、もちろんブッシュ大統領夫妻も出席したとのことである。

礼拝での黒人司会者の言葉「貴方が座り続けていなかったならば、私はここに立つこともなかったし、日々の居場所も違っていたでしょう」が実に感慨深い。

19・感動をありがとう (2005.11)

1998年十二月、バンコクの通信システムの仕事で出張し既に二年が経っていた。この年は特に忙しく日本滞在は 僅か十日、まさに悪戦苦闘の日々であった。

そんなある日、気分転換にと思い第十三回アジア大会の開会式に行ってみることにした。暑い国のことゆえナイターで あったが、オープニングセレモニーで前日に行われた女子マラソンの表彰式となり、いきなりライトアップされた日章旗と国歌を聞くことになりビックリした。気温三十度、湿度九十パーセントのバンコク、その中を黙々と走り続け金メダルに輝いた高橋尚子、しかも厳しい気象条件の下でアジア最高世界歴代五位であった。この感動をありがとう、と心から思いながらライトアップされたカラフルなスタジアムを何か別世界のように感じた。

十一月二十日に東京女子国際マラソンがあった。高橋尚子は二年前のこの大会で惜しくも二位となりアテネオリンピックの切符を逃し、一年前には右くるぶしを骨折するという怪我に苦しみ引退も考えたとのこと。その後、小出監督か

らも独立、栄養士、トレーナー、練習パートナーを雇い自分のチームを結成、今回に照準を合わせてアメリカのコロラド州で毎日走り込んだ。

今回は右足に軽い肉離れを起こしての不安のレースであったが、テーピングをしての強行出場。三十六キロ手前でスパットし独走状態になった、マラソンはいつ何が起こるか分からない、私は内心ハラハラしながら最後まで祈るような気持ちでテレビに観入った。そして、またまた大きな感動をもらった。

百六十二センチ、四十六キロ、三十三歳の高橋の一言から、「失速してしまった二年前よりも、自分自身に勝ちたい」

どんな天候でも、誰と走ろうとも、自分のレースをし、自分に勝つと言うことか……

「自分の感覚と走りが違うことに悩んだ時期があり、それが一番辛かった。以前の自分を打ち壊して日に日に感覚を取り戻せた」

苦しい長いトンネルの二年間だったことだろう。

「オセロゲームの白黒のようなもの、東京国際マラソンを何としても黒のまま終わりにしたくなかった」

二年前に追い越された終盤の上り坂を、今回は風のように独走し見事白に塗り替え復活！ 拍手！ 競技人生はあと二、三年と話しているそうであるが、あつけらかんと明るく、謙虚で清しい高橋尚子からまた爽やかな感動をもらいたいものである。